

## 資料組織法の現在

渡邊隆弘(神戸大学図書館)

### 0. はじめに

- ・資料組織法と司書の専門性  
標準化とネットワークによる変容  
「日常の作業」から離れて、必要な知識は何か?
- ・目録と資料組織  
目録そのもの(OPACなど)  
目録作業  
目録のための諸ツール      この点を中心に

### 1. 図書館目録をめぐる諸状況<sup>1</sup>

- 1.1. 目録対象資料の変化 - 電子資料(デジタル資料)の出現
  - ・パッケージ型(ローカルアクセス) ネットワーク型(リモートアクセス)
  - ・単なる「新たな一媒体の出現」にはとどまらない変化  
「可塑性」の高さ・・・物理媒体に縛られない、部分的加工が容易  
媒体・アクセス手段の多様性(「キャリア」の多様性)  
「リモートアクセス」資料も  
インタラクティブ性を持つ資料の登場  
「インタラクティブ・マルチメディア」(資料の全貌が把握しにくい)  
マルチメディア性の著しい増大  
これまで別々の媒体で扱われていた情報の組み合わせ  
複製の容易さとキャリアの不安定性  
同一の内容で、キャリアを異にするバリエーション  
加工の容易さと内容の不安定性  
微妙なバリエーションの増加  
WWW ページのように内容が不断に更新される資料
- ・図書館目録の枠組みに見直しが迫られている
  - ・「モノ」としての側面が不安定なものをどう捉えるか?
  - ・内容が固定的に保証されていないものをどう扱うか?
  - ・媒体別の規則構成(図書、地図、静止画、逐刊...)でよいのか?  
(電子地図、電子雑誌、マルチメディア...)
  - ・少しでも違えば「異版」と扱うのか?
  - ・何を目録するのか? (「所蔵」概念の融解)

---

<sup>1</sup> 渡邊隆弘ほか「最近における目録規則の改訂動向とその問題点 - 電子資料と継続資料を中心に」『図書館界』56(2), 2004.7. p.102-110

## 1. 2. 情報組織化環境の変化 - OPAC からインターネットへ

- ・ 目録データの機械化と OPAC (日本では、概ね 1980 年代後半～)
  - 現行目録ツールの枠組みはカード目録時代に形成
    - 機械化に十分応えているか？
    - 目録規則・・・ 標目の選択と統制 (記述とは別、標目数が労力に直結)
    - 分類表・・・ 「助記性」や記号の短縮 (人が見ることを前提とした措置)
    - 件名標目表・・・ 細目による事前結合方式 (音順配列を前提)
    - ツールの「規範性」の低下
- ・ インターネットの時代 (1990 年代後半～)
  - 図書館コミュニティの閉じた世界から、より開かれた世界へ
  - 分散環境と「相互利用性」(Interoperability)
    - 検索エンジン等との「競合」
    - 異種データベースとの連携
- ・ 目録作業の変容<sup>2</sup>
  - MARC と書誌ユーティリティ (NACSIS-CAT)
  - 委託と空洞化
  - OPAC の「ブラックボックス化」

## 2. FRBR - 資料の新しいとらえ方<sup>3</sup>

- ・ 資料の物理的側面と内容的側面
  - 現在の目録は、物理的側面が記述の根拠 (キャリアと内容は不可分)
  - 確固とした物理性が揺らいできた現実に、どう対応するか？
  - 利用者は本当は何を求めているのか？
- ・ Functional Requirement for Bibliographic Record (IFLA 1997)
  - 「書誌レコードの機能要件」
  - 書誌レコードの構造分析・・・ 「実体関連モデル (E-R モデル)」
- ・ 目録利用の「ユーザタスク」(利用者指向の分析)
  - 「発見」「同定」「選択」「入手」
  - 書誌レコードの各項目 (「属性」) は何のためにあるのか？
- ・ 資料を 4 段階の枠組み (抽象 具体) で把握
  - 「著作 (Work)」・・・ 知的・芸術的創造物の単位
  - 「表現形 (Expression)」・・・ 文字、音声等で表現された単位
  - 「体現形 (Manifestation)」・・・ キャリアが確定し、具体物となった単位
  - 「個別資料 (Item)」・・・ 個別の一点一点
  - 特に、「表現形」の設定が新しい

<sup>2</sup> 白石英理子「整理業務の変質？ - 図書館員はどうあるべきか」『現代の図書館』41(4), 2003.12. p.179-184

<sup>3</sup> 和中幹雄ほか訳『書誌レコードの機能要件』日本図書館協会, 2004.3. 121p

### 3 . 記述目録規則 ( ISBD、AACR2、NCR ) の動向

- ・ 1990 年代後半以降、活発な改訂の動き
- ・ 各規則の改訂
  - 日本目録規則 ( NCR ) 1987 年版改訂 2 版 ( 2001 刊行 )
  - 英米目録規則第 2 版 ( AACR2 ) 2002 年改訂版 ( ルーズリーフ式 )<sup>4</sup>
  - ISBD は資料種別ごとに改訂
  - 「電子資料」「継続資料」の改訂が主
- ・ 「電子資料」( Electronic Resources ) 「コンピュータファイル」
  - 1997 ISBD(ER)
  - 2000 NCR87 9 章「電子資料」 1987 年版改訂 2 版 ( 2001 ) へ
  - 2001 AACR2 9 章 ( ER ) 2002 年改訂版へ
  - 「機械可読データファイル」「コンピュータファイル」「電子資料」
  - 「異版と見なさない相違」の拡大
  - 「第 3 エリア」( リソースのタイプと量 ) と「第 5 エリア」( 形態的記述 ) の整理
- ・ 「継続資料」( Continuing Resources ) 「逐次刊行物」
  - 2001 ISBD(CR)
  - 2002 AACR2 12 章 ( CR )
  - 2004 NCR 13 章「継続資料」改訂案の公開<sup>5</sup>
  - 継続資料 = 「逐次刊行物 ( Serials ) 」 + 「更新資料 ( Integrating Resources ) 」
    - \* 逐次刊行物 . . . 物理的な刊行の継続性
    - \* 更新資料 . . . 内容的な継続性 ( WWW サイト、加除式資料 )
  - 更新資料に関する規定の追加 ( 情報源は「最新の更新状態」)
  - 逐次刊行物の誌名変遷の取扱い ( 新記入を作らない Minor change の範囲拡大 )
- ・ その他の改訂
  - NCR の和漢古書に関する規則整備 ( 2,3 章 )
- ・ 今後の展望 - より抜本的な検討へ
  - 章 ( 資料種別 ) ごとの改訂に限界 ( 資料種別の綻び )
  - 全体構造の見直し
  - FRBR をどう採り入れていくか
  - 「表現形」の記述
  - 典拠コントロール

<sup>4</sup>古川肇「『英米目録規則 第 2 版 2002 年版』の二つの章」『資料組織化研究』47, 2003.2. p.15-24

<sup>5</sup>JLA目録委員会ホームページ <http://www.jla.or.jp/mokuroku/index.html>

#### 4. 主題目録法（分類法・件名目録法）の動向

- ・記述目録法に比べると、鈍い変化  
目録対象資料の変化の直接的影響が薄い
- ・OPACにおける主題アクセスツール  
主題検索の重要性和困難（1980年代から議論）  
日本ではカード目録時代からの貧困  
MARCデータとパッケージシステムによる「復権」  
ブラックボックスのまま提供  
OPAC時代の分類表、件名標目表へ  
新たな能力（ハイパーリンクなど）を生かせる構造  
機械処理のための論理性  
利用者への提供を前提とした表現・構造  
カード目録時代の残滓の整理
- ・NDC（日本十進分類法）  
9版（1995）      10版（2008?）<sup>6</sup>  
概ね現行方針を踏襲？  
電子版（NDC・MRDF）  
1989刊行（NDC・MRDF8）      MRDF9へ  
90年代半ばからOPACでの利用例
- ・BSH（基本件名標目表）<sup>7</sup>  
4版（1999）      3版（1983）      大規模改訂  
標目数の増加（約4,250      約7,800）  
細目の見直し  
参照関係をシソーラススタイルに（「階層構造標目表」）  
電子版（BSH4-CF）の刊行（2002）  
OPACでの利用？（階層構造の活かしかたが焦点）<sup>8</sup>
- ・NDLSH（国立国会図書館件名標目表）  
BSHと比べた利点： 標目数が多い、日常的なメンテナンス  
欠点： 参照の不足  
改善への動き<sup>9</sup>
- ・今後の主題アクセスツール  
OPACでどう生かしていくか  
論理構造の追求（機械処理を前提とした整理）  
利用者志向の表現  
「事前結合方式」をどう考えていくか

<sup>6</sup> 金中利和「日本十進分類法新訂第10版の作成について」『図書館雑誌』98(4), 2004.4

<sup>7</sup> JLA件名標目委員会「基本件名標目表」第4版の完成」『図書館雑誌』93(8), 1999.8

<sup>8</sup> 渡邊隆弘「件名標目によるOPACの主題検索」『TP&Dフォーラムシリーズ』8, 1999.7.

<sup>9</sup> 大場利康ほか「図書における主題検索 NDL-OPACでの検索と国立国会図書館の取組み」『情報の科学と技術』54(7), 2004

## 5 . ネットワーク情報資源とメタデータ<sup>10</sup>

- ・ ネットワーク情報資源の爆発的な増大・充実（中心は WWW 情報）
  - 図書館の情報資源として無視できない
  - 検索エンジンによる利用の限界（玉石混淆）
    - 一定の評価を経た情報リストの必要性
    - 「リンク集」 サブジェクト・ゲートウェイ（Subject Gateway）
- ・ 「メタデータ」（データに関する構造化されたデータ）
  - 広くは「二次情報」全般を指す
  - 全文デジタル化されたネットワーク情報資源にも必要か？
  - 全文検索の限界、マルチメディア情報の存在
  - 様々なコミュニティでメタデータ規則の提唱（90年代後半～）
- ・ ダブリンコア（Dublin Core Metadata Element Set）<sup>11</sup>
  - オハイオ州ダブリン（OCLC 本部）で最初の会議（1995）
  - 基本的な「コアエレメント」を規定し、「相互利用性」を重視
  - 15 項目のコアエレメント
    - （その後「クオリファイア（qualifier）」による若干の詳細化）
    - 項目はすべてオプション、繰り返し自由（緩やかな規則）
    - 各コミュニティによる拡張を想定
  - わが国でも、メタデータ作成に広く使われている
- ・ メタデータと図書館目録
  - 相互利用性の確保と統合的な検索（「クロスウオーク」）
  - 簡略さと詳細さのバランス

---

<sup>10</sup> 渡邊隆弘「図書館目録とメタデータ」『図書館界』53(2), 2001.7. p.126-133.

<sup>11</sup> 杉本重雄「解説 Dublin Coreについて (1)(2)」『情報管理』45(4～5), 2002.

## OPAC 評価の実際（導入編）

渡邊隆弘（神戸大学図書館）

### < レポート課題 >

#### WebOPAC の評価と改善提案

勤務館（でなくともよいが）の OPAC について様々な角度から  
近隣図書館・都道府県立図書館・NDL-OPAC 等も参考にし、相対的に論じていた  
だけるとなお可  
特に問題意識があれば、館内で提供する OPAC について論じていただいても可

### OPAC 世代論

C.R.Hildreth (1984)<sup>1</sup> 1980 年代米国での展望

#### 第一世代（当時でも古い OPAC）

単純で限定された検索

タイトル、著者、標準番号など、完全形を原則

簡略書誌レコードの単一表示フォーマット

カード目録のモードという色彩）

#### 第二世代（当時の OPAC の主流）

やや柔軟性のある検索

キーワードアクセス、ブール演算、部分一致検索

インデックスや標目のブラウジング

利用者に応じた対話モード（初心者向け、エキスパート向け...）

完全書誌レコードの表示、多種の表示フォーマット、結果のソート

わかりやすいエラーメッセージ、位置に応じたヘルプ機能

#### 第三世代

典拠によるアクセス、フリーテキストと統制語検索の統合

日常語による探索表現

個別的な注文に応じた表示

内容に応じた自動エラー訂正、ヘルプ表示

提供データの拡張（抄録／索引、多数・多種のデータベースとの連結）

---

<sup>1</sup> Charles R. Hildreth “Pursuing the ideal: generations of online catalog”. *Online catalogs/reference converging trends*. Chicago, ALA, 1984. p.31-56

注 2 の論文などに日本語で紹介されている。

## OPAC 評価指標の例（別紙で配布）

牧村・竹内（1994）<sup>2</sup> 大学図書館を想定

Babu & O'Brien(2000)<sup>3</sup> WebOPACの評価

\*あくまで参考。これに合わせて全般的にレポートを書けとは申しません。

むしろ自分なりの視点で問題を追求いただいたほうが実り多いかと思います。

## さまざまな評価の視点（例）

### ・ 検索の目的と望まれる機能

#### 既知資料検索

ふつうはタイトル・著者から

一見単純だが、問題も多い 上田ほか（1999）<sup>4</sup>

書誌情報からの索引語切り出しの問題

#### 主題検索

分類・件名データの生かしかた

その他の項目検索との併用

### ・ キーワード検索とブラウジング機能

#### ブラウジング機能の必要性

情報要求はいつも明瞭なわけではない

WWWの「ハイパーリンク」を生かす？

### ・ 索引語の生成と検索語の入力（どのようなキーワードで検索できるか？）

OPAC時代に入り、標準化の喪失とブラックボックス化

検索対象項目（書誌情報の、どのデータ要素から検索できるか）

索引語切り出し（どういう形でインデックスを作るか）

完全形か部分（単語など）に分けるか（最近は「全文検索」も）

分かち書きの問題

正規化の問題（文字種や特殊文字の扱いなど）

検索語入力（どういう形の入力に対応できるか）

正規化の問題など（索引語切り出しとの対応）

資料種別（図書、雑誌...）と検索機能

### ・ 検索機能と検索画面のインターフェース

論理演算（ブール演算）機能

その他の検索オプション（部分一致、同義語検索など）

利用者レベルに応じた検索画面

ヒットしない時、多すぎる時の対応

---

<sup>2</sup> 牧村正史、竹内比呂也「大学図書館における目録の評価について - OPACの機能を中心として」『大学図書館研究』43, 1994.3. p.1-11

<sup>3</sup> B. Ramesh Babu, Ann O'Brien "Web OPAC interfaces: an overview" *The Electronic library*, 18(5), 2000. p.316-327

<sup>4</sup> 上田修一ほか「WWW上のOPACにおける既知事項検索の諸問題」『Library and information science』41, 1999. p.1-15

- ・表示機能と表示画面のインターフェース
  - 検索結果の並び替え（ソート）機能
  - 書誌情報、所蔵情報の表示方法
    - 表示対象項目（簡略、詳細）
    - 資料種別ごとの対応（図書、雑誌…）
- ・ヘルプ機能、ガイド機能
  - わかりやすい表現の問題
  - 検索者の意図を的確によみとったヘルプ？
- ・インターフェースに関するその他の問題
  - 児童向け、高齢者向け、など
- ・図書館サービスとの連結
  - 所在情報のきめ細かな表示（書架へのスムーズなアクセス）
  - 貸出予約、貸出状況確認など（パーソナルなサービス）
  - 複数館からなる図書館システムへの対応
- ・書誌データそのものの問題
  - データの精度、品質維持
    - 典拠コントロール
  - データの収録率（遡及入力率、資料種別ごと）
  - データの更新頻度
  - 特殊な資料への対応（地域資料など）
- ・図書館目録の拡張
  - より詳細な情報提供（目次、概要、表紙画像など）
  - 外部データベースとの連動
  - 他機関との横断検索

9月5日の計画？